

孤なる曙

馬鹿げた時だけが流れ
馬鹿げた終幕のみが残る
そんな毎日に何を過ごせと言うのか
俗世さえ手に余る、この毎日に

鈍感な者のみが前進を許され
慄える者は壁を押してしか進めない
ああ、しかも後ろからは火焰が迫り
とどまることを許さないというのに

世界が夜明けに目覚める時
恐らくは夜を迎えた時以上の底知れぬ恐怖が襲い
「生きる義務」が大気に充ち
人間は群れなして生から逃亡するだろう

いや、むしろ認識は認識を産み出し
限りない後ずさが加速し
宇宙がかつて膨張しだしたその原点に向け
終焉という名の収束を開始するだろう

静謐^{うち}の中に生は手に余り
湿った風の中に恐怖に慄える
そんな毎日に何を過ごせというのか
我が子と共に

(1990.1.12)